

# 研究の概要

# 研究の全体構造

学校教育目標

あの丘を越えよ  
—自発・創意・責任と自治の精神高らかに—

・社会的背景・要請  
・秋田県の教育課題

【目指す生徒像】

- 1 主体性をもって挑戦する生徒
- 2 批判的な思考力を発揮する生徒
- 3 使命感をもって行動する生徒

・生徒の実態  
・教師と保護者の願い

【令和3年度研究主題】（1年次）

未来を自立的に生きる  
～出会い・発見・喜びのある学びを通して～

〔研究仮説〕

教科等の特質や見方・考え方に着目したり、ICTを活用したりすることにより、本県や本校が推進してきた「ふるさと教育」や「問い直しのある学び」、「ミエルトーク」等の優れた教育実践の質を高めれば、子どもは、学びを通して様々な事物と出会い、自他のよさを発見し、学ぶ喜びを実感しながら、未来を自立的に生きる基礎となる「主体的な行動力」「批判的な思考力」「多角的な省察力」を身に付けていくことができるであろう。

〔授業で目指す生徒の姿と資質能力〕

主体的な行動力	批判的な思考力	多角的な省察力
目を輝かせて、能動的に学習する	笑顔で関わり、批判的に熟慮する	満足げな顔で、多角的に省察する
↓	↓	↓
問いを立て、追究する知的好奇心 自分の可能性を信じる自己肯定感 仲間の個性を認める支持的な態度	筋道を立てて考え伝え合う表現力 他者を受容できる寛容さと柔軟性 多面的・多角的に問い直す探究心	最後まで粘り強くやり遂げる意思 失敗や挫折も経験に変える逞しさ 学びを人生や社会に生かす人間性

〔研究内容〕 学習の質を一層高める授業改善のポイント

- ① 各教科の特質に応じた「学びのプロセス」を機能させること  
→「問い」「問い直し」「振り返り」の活性化
- ② 各教科の授業で育成したい、見えにくい資質・能力を可視化すること  
→「ミエルトーク」の活性化や「ICT機器の活用」の推進
- ③ 主体的・対話的で深い学びの基盤となる学級の支持的な風土をつくること  
→「総合 DOVE」や道徳の時間、特別活動の活性化

## □1 はじめに

平成28年12月に出された中央教育審議会答申の中で、「学力に関する調査においては、判断の根拠や理由を明確に示しながら自分の考えを述べたり、実験結果を分析して解釈・考察し説明したりすることなどについて課題がある」と指摘されている。また、学ぶことの楽しさや意義が実感できているかどうか、自分の判断や行動がよりよい社会づくりにつながるという意識をもっているかどうかという点では、肯定的な回答が国際的に見て相対的に低いことも指摘されている。こうした調査結果から、学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら、自らの能力を引き出し、学習したことを活用して、生活や社会の中で出会う課題の解決に主体的に生かしていくという面から見た学力に課題があることが示された。

さらに、平成30年の第3期教育振興基本計画では、2030年以降の社会を展望した教育政策の重点事項として、「自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する人材の育成」が挙げられている。さらに、「変化に適応するのみならず、自らが自立して主体的に社会に関わり、人間ならではの新たな価値を創造し、将来を創り出すことができるようになるべきであり、そのためには、予測不能な状況の中で問題の核心を把握し、自ら問いを立ててその解決を目指し、多様な人々と協働しながら、様々な資源を組み合わせることで解決に導いていく力の重要性」が指摘されている。

このことから、未来を自立的に生きていく生徒を育てるためには、予測困難な未来社会において、予期せぬ課題に主体的に立ち向かい、判断の根拠や理由を省みて考え明確にしながら、自分の判断や行動をよりよい社会づくりに生かしていく資質・能力が求められている。

## □2 研究のコンセプト

平成29年告示の中学校学習指導要領解説（総則編）の「1 改訂の経緯及び基本方針(2) 改訂の基本方針 ③「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進」に、「子どもたちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要である」と示されている。

そこで、本研究では、次の3点のことをコンセプトとして、研究推進に努める。

### ① 本県の学校教育共通実践課題である「ふるさと教育」の趣旨を基盤とする

ふるさと教育は、本県において、平成5年度から推進されており、ふるさとの事物との出会い、発見、感動を通じて、①豊かな心を醸成し、②知的活動を一層高め更に調べ追究する自己教育力を養い、③ふるさとのよさに気付き、自信と誇りを新たにすることにより、これからの社会を主体的にたくましく生きる力を育み、「ふるさとを愛し、社会を支える自覚と高い志にあふれる人づくり」を目指すものである。

本研究でも、「日本の栄えを担い立つ自覚と高い志にあふれる人づくり」を目指して、ふるさと教育のよさを継承し、「出会い・発見・喜びのある学び」を、日々積み重ねていく。

### ② 本校の「問い→問い直し→振り返り」という学びのプロセスを活性化させる

本校の学びのプロセスは、「秋田の探究型授業」の基本プロセスと軌を一にするものである。本県では、「秋田の探究型授業」の基本プロセスをベースとしながらも、各教科等の特質や自校の児童生徒の実態に応じた適切な問題解決の方法等を弾力的に取り入れることを通じて、児童生徒一人一人に応じた質の高い学びを保障することを重視してきた。

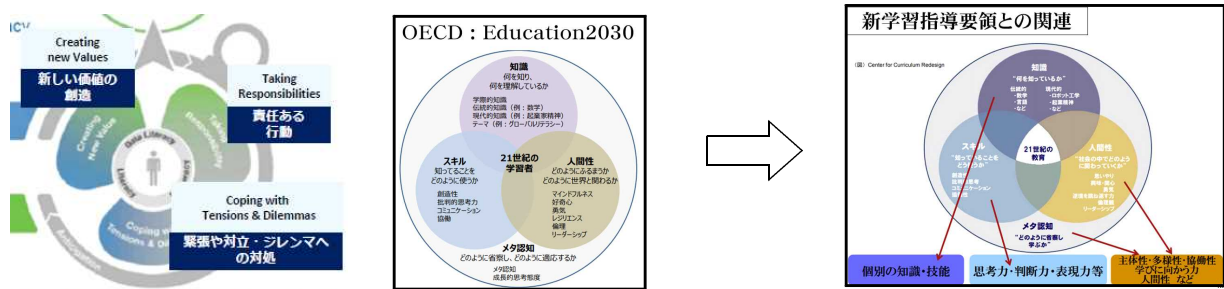
本研究でも、教科等横断的な学びのプロセスをベースとしながらも、各教科等の特質や見方・考え方、各教科等における生徒の実態に応じて、各教科等において独自の学びのプロセスを構築していく。

### ③ 「ICT」や「SDGs」等の新しい取組を取り入れ、学習活動を活性化する

ICTは、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために必要なツールである。本研究では、黒板やホワイトボード等を用いて実施してきた学習活動を、大型モニターやタブレット等を活用して行うことにより、より主体的・対話的で深い学びにしていく可能性を探っていく。また、平成10年度以降継続してきた総合DOVEの学習をSDGsの視点から見直し、学習活動の質の向上を図っていく。

## □3 研究の背景

OECDでは、「生徒の学習到達度調査」(PISA)の実施する際、まず何を測定すべきかの「キー・コンピテンシー(主要能力)」を定義している。Education2030でも、世界中の政府や民間機関などとも連携しながら、コンピテンシー(文部科学省は「資質・能力」と訳す)を再定義している。



1: OECD Education2030 中間まとめ、日本語訳を追記

CCRによる21世紀コンピテンシーの枠組み

教育課程企画特別部会における論点整理について

(出典:「人材像WG参考資料集」経済産業省)

(報告)の補足資料(4)より

また、OECDでは、①知識②スキル③態度・価値から構成されるコンピテンシーに加え、▽新たな価値を創造する力▽対立やジレンマを克服する力▽責任ある行動をとる力という「変革を起こす力のあるコンピテンシー(主要能力)」を、「見通し、行動、振り返り」(AAR)という連続した学習過程を通して身に付けるという「学びの羅針盤」を示している。

新学習指導要領でも、育成を目指す資質・能力を(①知識・技能②思考力・判断力・表現力等③学びに向かう力・人間性等)の三つの柱で構造化しており、OECDの学習の枠組みと共通していることが分かる。平成28年12月に出席された中央教育審議会の答申に、「学びの地図」という言葉が入っていることも、Education2030を意識したものと言える。

つまり、これまで本校で育てていた批判的な思考力(知識, スキル, 態度)に加え、今後10年間で育成すべき資質・能力が「変革を起こす力のあるコンピテンシー」として示されたといえる。そこに示されている「新たな価値を創造する力」「対立やジレンマを克服する力」「責任ある行動をとる力」は、まさに本校で育てたい資質・能力である附中三精神「自発」「創意」「責任」と軌を一にするものである。

自発・・・主体性をもって挑戦する生徒  
 創意・・・批判的な思考力を発揮する生徒  
 責任・・・使命感をもって行動する生徒

2021年、世界はコロナウイルスという未知のウイルスによって、これまで当たり前でできていたことが当たり前でないという状況になっている。グローバル化の進展や技術の進歩の加速だけでなく、未知のウイルスの存在によって、社会、経済、環境など様々な分野において前例のない変化に直面し新たな価値や取組を創り出すことが求められる時代となっている。そのような時代を生きる子どもたちを育てる学校には、習得した知識を「どのように活用」し、「どのように共通理解」し、「どのように実践」するかを問い直し、教育の在り方そのものを見直すことが求められている。そこで私たちは、一人一人が自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな未来を創造し、未来を自立的に生きるための資質・能力の育成が必要であると考えた。

## □4 生徒の実態

本校では、平成30年度から3年間、附中三精神である「自発」「創意」「責任」の育成を目指し、研究主題を「共に未来を切り拓く 開かれた個」とし、附中三精神を発揮しながら、集団の中で一定の役割を果たしていく生徒の育成に努めてきた。特に、「社会的背景・要請」「秋田県の教育課題」「生徒の実態」「教師と保護者の願い」の4つの側面から、予測困難な未来社会において力強く自立し、他者との共生の中で新しい価値を創造していく人材を育成するため、自己の推論のプロセスを意識的に吟味し、内省的に熟慮する思考である批判的な思考が必要と考え、その思考の基盤となる資質・能力を「論理的に偏りなく考える力」「他者の立場で考え、議論する力」「新たな価値を創造する力」とし、3年間研究を進めてきた。

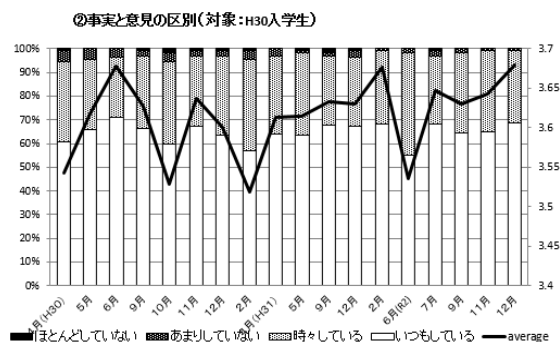
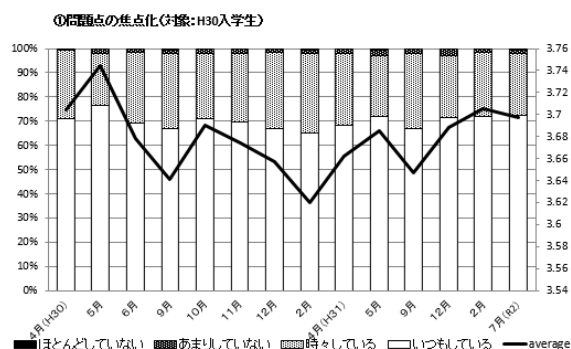
その3つの資質・能力を育成する上で取り組んだのは、「B(9)『相互理解, 寛容』とA(1)『自主, 自律, 自由と責任』を全学年の共通重点指導内容とした道徳」「協働的課題解決学習の意識化」「話し合いの根拠を示すためのツールである「ミエルトーク」の実践」「自己肯定感を高めるためのNES評価の活用」である。

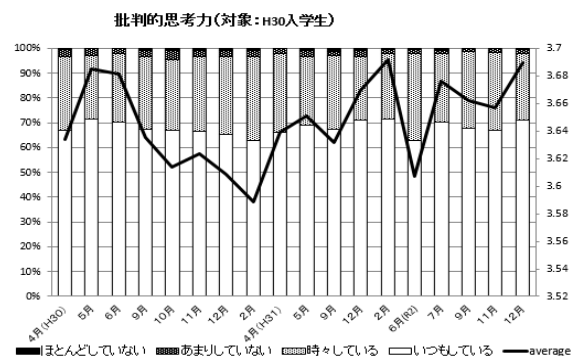
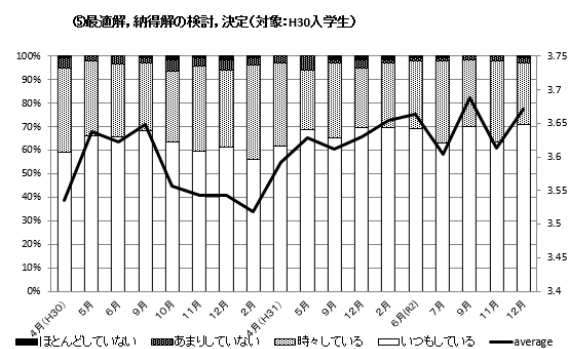
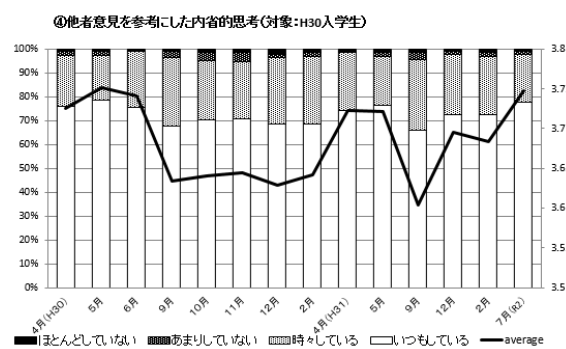
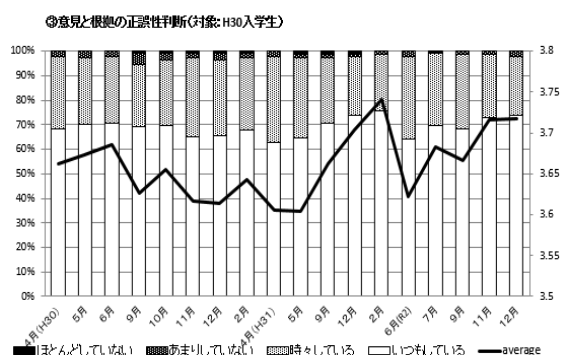
本校では、平成30年4月から「批判的な思考力」に関わる5つの質問をアンケートに示し、研究検証材料の一つとしている。それぞれの質問に対して、生徒は「いつもしている」、「時々している」、「あまりしていない」、「ほとんどしていない」から一つ選び、回答した。

〈「批判的な思考力」に関わる5つの質問〉

- ① 話し合いをするときは、何が問題になっているのか、を考えるようにしていますか。  
(問題点の焦点化)
- ② 相手の意見を聞く時は、事実と意見を区別して考えるようにしていますか。  
(事実と意見の区別)
- ③ 相手が述べている意見と理由がきちんとつながっているか、考えて聞くようにしていますか。  
(意見と根拠の整合性判断)
- ④ 相手の意見を聞いて、自分の考えが正しいのかを考えるようにしていますか。  
(他者意見を参考にした内省的思考)
- ⑤ 自分やグループの意見をまとめるときは、全体のつながりを考えてまとめていますか。  
(最適解, 納得解の検討, 決定)

〔生徒アンケート調査 質問内容〕





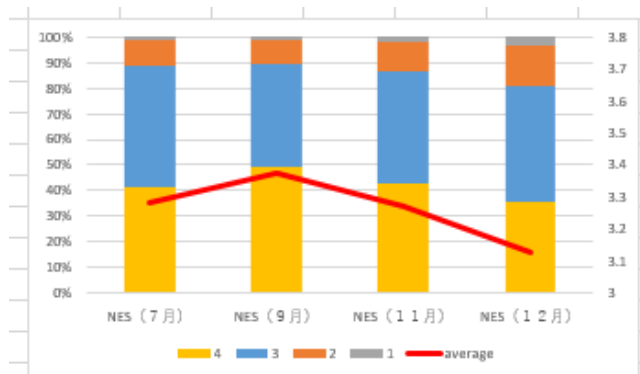
上のグラフは、研究初年度の1年生の3年間の経年比較を示している。令和2年度より、アンケートの一部修正を行ったため、①と④の項目に関しては、7月までの見取りとなっているが、月ごとの上下変動はあるものの、どの項目とも研究初年度よりも肯定的な回答が増えていることが分かる。特にアンケート項目の⑤の「最適解, 納得解の検討, 決定」に着目してみると、平成30年4月から平成31年2月までは下降傾向が見られた。その原因は、思考を見える化する「ミエルトーク」の実践方法に、教師間での指導のずれがあったからだと考える。そのため、平成31年度に向けて「「ミエルトーク」実践マニュアルビデオ」を作成し、4月には、全校一斉にビデオを見て確認し、各学級共通で「「ミエルトーク」実施のための題材」をもとに実践を行った。これにより、「ミエルトーク」を行うことで、根拠となる思考を見える化することができ、批判的な思考力を育成する上で必要なツールであることが明らかになった。

#### <課題>

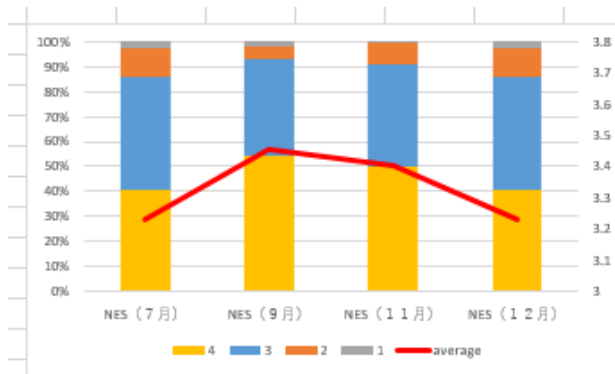
令和2年度では、3年次研究の総括として「批判的な思考力を磨く授業実践」をサブテーマに据え、批判的な思考力を支える「態度」と「スキル」の育成、批判的な思考力を支える「知識」の習得と「見方・考え方」の育成に努めた。令和2年度では、特に「①B(9)『相互理解, 寛容』とA(1)『自主, 自律, 自由と責任』を全学年の共通重点指導内容とした道徳」「②協働的課題解決学習の意識化」「③話し合いの根拠を示すためのツールである「ミエルトーク」の実践」「④自己肯定感を高めるためのNES評価の活用」の4つの項目が、どのように変容するかを見取るアンケートも実施した。

3年生のアンケート結果からは、どの項目とも7月から10%以上増加傾向にあった。特に、「②協働的課題解決学習の意識化」については、20%近く増加した。

1・2年生のアンケート結果を見ると、①、②、③に関しては、微増もしくは増加傾向にあるものの「④自己肯定感を高めるためのNES評価の活用」の項目に関しては、下降傾向が見られた。



＜1年生＞



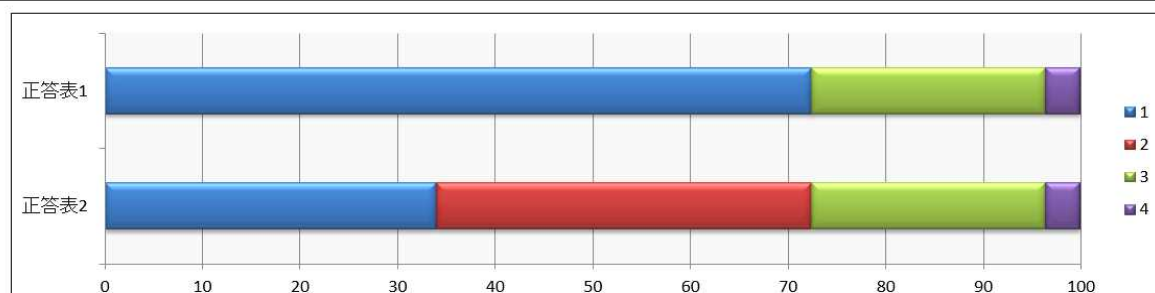
＜2年生＞

「④自己肯定感を高めるためのNES評価の活用」に関わる質問

- ・学習活動をする時は、自信をもって取り組んでいる。
- ・学習活動での発言や友達同士の話し合いでは、自分自身が友達や周りの人に役立っていると感じることがある。
- ・学習活動での発言や話し合い活動では、自分自身の意見やアイデアが周りから認められると感じることがある。

本校生徒の学習状況調査の学習面での結果をみると、平均通過率は秋田県の平均と比べても10%から30%以上も高い。しかし、本校で捉える自己肯定感を「自己有用感（自分が相手のためになっていると感じた時の充実感）」と「共感的な人間関係」の豊かさと考えると、学習に対する個人的な理解度はあるものの、自分の考えの根拠やその考えを発表することに自信がないという傾向が見られる。自分自身では、「自己有用感」や「共感的な人間関係」が向上していると捉えている3年生であっても、全国学力学習状況調査の数学の結果をしてみると、上部の棒グラフから7割以上の生徒が正答している問題でも、下のグラフから、正答した生徒の半数しか、しっかりとした根拠を基に答えていないことが分かる。つまり、根拠を基に正確に説明できている生徒は、全体の3分の1程度にとどまってしまうのである。

生徒の実態～令和2年度全国学力学習状況調査の数学の結果から



正答表1（1 正答範囲、3 誤答、4 無回答） 正答表2（1 完全、2 正答範囲、3 誤答、4 無回答）



## □5 研究主題について

# 未来を自立的に生きる

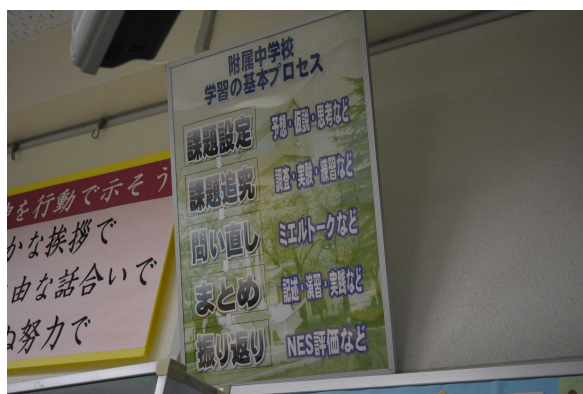
－出会い・発見・喜びのある学びを通して－

本校では、「未来を自立的に生きる」ためには「主体的な行動力」「批判的な思考力」「多角的な省察力」の3つの資質・能力が必要だと考えている。それらの資質・能力は、本校の校是でもある「自発」「創意」「責任」の附中三精神と軌を一にするものである。「主体的な行動力」とは、目を輝かせて能動的に物事に参画する力である。「批判的な思考力」とは、矛盾、相容れないような考えや立場にあつたとしても、互いのつながりや関連性を考慮しながら、新しい仕組みや価値を生み出していく力である。「多角的な省察力」とは、自分の行動を多様な視点や立場から振り返り、自分の成長や他者への影響などについての的確に判断できる力である。

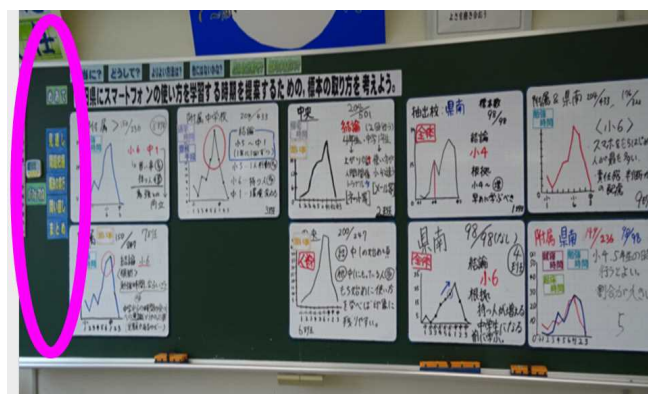
### (1) 研究仮説

教科等の特質や見方・考え方に着目したり、ICTを活用したりすることにより、本県や本校が推進してきた「ふるさと教育」や「問い直しのある学び」、「ミエルトーク」等の優れた教育実践の質を高めれば、子どもは、学びを通して様々な事物と出会い、自他のよさを発見し、学ぶ喜びを実感しながら、未来を自立的に生きる基礎となる「主体的な行動力」「批判的な思考力」「多角的な省察力」を身に付けていくことができるであろう。

2020年は、教育においても社会においても大きな変換を余儀なくされた年である。コロナ禍の影響により、これまでの日常が様変わりし、まさに「予測不可能な未来」が起きてきた。このように、今後も自分、他者、社会、自然・環境の中では、様々な新しい問題が起こり、その問題に対して、自ら問いを見付け、解決したと思ったことを様々な根拠に基づいて問い直し、実践を振り返ることが新たな課題の解決につながっていく。私たちは社会の一部である学校や学級の中で子どもたちにそのような課題解決のプロセスを体感させたいと考えている。本県では「ふるさと教育」を基盤として、新たな課題や人、事物と「出会い」、協働的な学びを通して新たな価値を「発見」し、振り返りを通して学ぶ「喜び」を味わえる「秋田の探究型授業」が継承されてきている。また、本校においても「問い直しのある学び」や「ミエルトーク」等の優れた教育実践が重ねられてきている。私たちは、それらの優れた教育実践を活性化していくことにより、未来を自立的に生きる基礎となる「主体的な行動力」「批判的な思考力」「多角的な省察力」を身に付けていくことができると考え、本研究を推進していく。



<教室に掲示してある、協働的  
課題解決学習の基本プロセス>



<授業の中でのプロセスの掲示>



## (2) 本校で育成を目指す「未来を自立的に生きる」ための具体像

- ・目を輝かせて、能動的に学習する生徒
  - 知的的好奇心をもって問いを立てている。
  - 自分の可能性を信じて、自分もできそうだと考えている。
  - 仲間の個性を認め、考えや思いを支持している。
- ・笑顔で関わり、批判的に熟慮する生徒
  - 筋道を立てて考え、的確に伝え合っている。
  - 寛容さと柔軟性を発揮し、他者を受容している。
  - 探究心をもって、多面的・多角的に問い直している。
- ・満足げな顔で、多角的に省察する生徒
  - 最後まで粘り強くやり遂げようとしている。
  - 失敗や挫折をしても前向きに活動している。
  - 日々の学びを、人生や社会に取り入れようとしている。

## (3) 研究の構想について

本研究は、「未来を自立的に生きる」ための資質・能力である「主体的な行動力」「批判的な思考力」「多角的な省察力」を育成するために、次の三つのことに重点的に取り組む。

- ① 「問いー問い直しー振り返り」を活性化することを通して、各教科の特質に応じた「学びのプロセス」をこれまで以上に機能させること
- ② 「ミエルトーク」の活性化や「ICT機器の活用」の推進し、各教科の授業で育成したい、見えにくい資質・能力を可視化すること
- ③ 「総合DOVE」や道德の時間、特別活動の活性化し、主体的・対話的で深い学びの基盤となる学級の支持的な風土をつくること

## □主体的な行動力（学びのプロセスを機能させて）

## 目を輝かせて、能動的に学習する生徒を目指して

「知的的好奇心」と「自己肯定感」の育成

「問い」とは、体験や教材との出会い、学習課題の提示（発問）による刺激などによって、既得の知識や技能の曖昧さ、未熟さに気づき、課題の解決や自分自身の向上に向けて「どうしたらよいか」の見通しをもつことによって生じる追究意欲が伴う内的で個別の意識である。この意識が、追究する知的的好奇心であり主体的な行動力につながっていく。

「問いの練り上げ」とは、「疑問」や「問い」を学習集団で検討したり、解決の見通しをもったりすることで、個人の「問い」を全体に広げ、一人一人が課題解決に取り組んでいこうとすることである。この協動的な取組によって「問い方」の新たな視点に気付いたり、追究方法が明確になったりし、「自分でもやれそうだ」という個の思いが高まり、集団の追究意欲も高まっていくことになる。

「問い直し」は、今までと異なる視点から、問いに照らして課題や課題解決の過程を見直したり、課題解決をした結果を多面的・多角的に捉え直したりすることである。

「振り返り」とは、自分自身の課題解決のアプローチに対する自信、不安、疑問をもとに実践経験を振り返り、そこでの不安や疑問の原因が何であるかに気づき、協動的な学習で得た解決の可能性を吟味し、次の学習に対する意欲をもつことである。

これらの活動は、「自分でもやれそうだ」「もっとやってみたい」という自分の可能性を信じる自己肯定感につながり主体的な行動力の育成につながっていく。

#### 支持的な態度の育成

「問いー問い直しー振り返り」の「学びのプロセス」を基盤とした学習スキルは、支持的な態度を育成する上で重要である。「問い」の場面で既習の知識・技能等を確認したり、「問い直し」の場面で個々の思考・判断、知識・技能等を奨励し価値付けたり、「振り返り」の場面で「見方・考え方」に照らして思考・判断等を価値付けたりすることは、仲間の個性を認め合う支持的な態度と結びつき、自己の思いを存分に発揮する主体的な行動力の育成につながっていく。

[資料1]



〔資料2〕

## 「問い・問い直し・振り返り」を活性化するための視点

学習過程：問題解決の過程

①～⑧：教科横断的な授業改善の視点

●：期待される子どもの姿

学習過程		主体的な学びの視点	対話的な学びの視点	深い学びの視点
問い	見通しを立てる	① 子どもの実態に応じた教材や教具等の準備と提示 ● 興味・関心が高まる ② 適度な困難さを伴う具体的な課題やめあての設定 ● 学習意欲が高まる	① 生活体験や既習事項などを想起させる手立て ● 自分自身と向き合う ② 互いの思考・判断、知識・技能等の比較や可視化 ● 共通点や相違点をつかむ	① 本時の学習に関連する既得の知識・技能等の確認 ● 知識・技能などが定着する ② 自校で育てたい資質・能力と学習活動との関連の明確化 ● 学習のゴールをつかむ
	自分で考える	③ 予想や試行錯誤など、自分で模索する学習活動の設定 ● 自分の現状を捉える ④ 子ども一人一人の学習状況の確認 ● 学習活動が自分事になる	③ 学習活動の目的や内容に応じた教材や教具等の提示 ● 新たな情報等を入手する ④ 互いの思考・判断、知識・技能等の違いの焦点化 ● 追究課題が明らかになる	③ 既得の「見方・考え方」の活用状況の把握 ● 知識・技能等を活用する ④ 個々の思考・判断、知識・技能等の奨励、価値付け ● 自分のよさや特徴を捉える
問い直し	他者と学び合う	⑤ 学習活動の進捗状況などの把握と計画的な指導や支援 ● 粘り強く活動に取り組む ⑥ 思考・判断や説明・報告等のよさや課題の計画的な把握 ● 自分の持ち味を発揮する	⑤ 意見などを比較したり関連付けたりする視点等の明示 ● 考えや思いをつなげる ⑥ 多様な意見をつなぎ、学習のねらいに迫る意図的指名 ● 学び合いの成果を伝え合う	⑤ 学び合いの成果を学級全体で共有するための言語活動 ● 考えや思いを表現する ⑥ 思考・判断等を揺さぶる、子どもの発言等への問い返し ● 考えや思いが広がり深まる
	振り返り	⑦ 課題やめあてに照らした、観点別評価や個人内評価 ● 自分の進歩を捉える ⑧ 本時の学習と次時の学習との関連の確認 ● 関心・意欲が一層高まる	⑦ 互いの変容や学習の成果を認め合う相互評価 ● 学び合いのよさを実感する ⑧ 「見方・考え方」に照らした思考・判断等の価値付け ● 「見方・考え方」を捉える	⑦ 学習内容や思考過程が一目で分かる板書の構成 ● 学習内容を再構成する ⑧ 自校や各教科等で育む資質・能力に照らした自己評価 ● 学習活動の意義を確かめる

※1 学習過程や授業改善の視点等は、全て例示です。また、必ずしも一方向、順序性のある流れではありません。

※2 一単位時間の授業では、上記の学習過程や授業改善の視点の一部を取り扱うこともありえます。

「平成29年度 中央地区の教育」より参照

## □批判的な思考力（「ミエルトーク」の活性化とICTの活用を通して）

笑顔で関わり、批判的に熟慮する生徒を目指して

筋道を立てて考え、伝え合う表現力の育成

「ミエルトーク」における主張タイムは、一人一人の主張を大事にするためシンキングタイムでまとめた自分の考えを結論だけ伝え、質疑応答はしない時間である。質疑応答をしないが故に、ねらっている学習効果である「個々の発信力、態度の向上」「偏らない話し合い活動」「他者の考えを尊重した、自己意見の分析」「思考視野の広がり」と記憶の想起」を達成するためには、筋道を立てて考え、伝え合う表現力が必要となり、これが批判的な思考力の育成につながっていく。

他者を受容できる寛容さと柔軟性

「ミエルトーク」における分析タイムは、友達の結論に質問と説明を繰り返し、意見を深め合いながら内容を構造化し、問題解決の糸口を模索する時間である。友達の結論に質問と説明を繰り返す性質から、「多面的・多角的な見方・考え方の育成」「意見の整理、問題点の焦点化、問題解決の糸口の焦点化」「証拠、根拠に基づいた論理的思考力の育成」などの学習効果をねらっている。しかし、この学習効果を達成するためには、他者を寛容と柔軟な心で受容することが必要となり、これが批判的な思考力の育成の基盤となる。

多面的・多角的に問い直す探究心

「ミエルトーク」におけるまとめタイムは、結論をまとめ、最適解、納得解を検討し意思決定をする時間である。ねらっている学習効果は「根拠を整理・分類・統合し、最適解、納得解につなげる」「新たな価値の創出」であり、多面的・多角的に問い直す探究心があつてこそ達成できるものである。故に、多面的・多角的に問い直す探究心は、批判的な思考力の育成には欠かせない要素である。

### 「ミエルトーク」の進め方と役割分担

#### 進め方について

No	活動名称	活動内容	ねらっている学習効果
1	シンキングタイム	・話し合いに必要な自分の考えを、これまでの経験や知識・技能を根拠にまとめる段階	・主張タイムに向けて、自己の思考や行動を客観的に把握し認識する。 ・授業終末時の振り返り活動における多角的な省察力の向上。 <u>学習者のレディネスの把握</u>
2	主張タイム	・一人一人の主張を大事にするためシンキングタイムでまとめた自分の考えを結論だけ伝え、質疑応答はしない。	・個々の発信力、態度の向上 ・偏らない話し合い活動 ・他者の考えを尊重した、自己意見の分析 ・思考視野の広がり」と記憶の想起 <u>見通しの把握と問いの練り上げ</u>
3	分析タイム	・友達の結論に質問と説明を繰り返し、意見を深め合う。 ・話し合い内容を構造化する。 ・問題解決の糸口を模索する。	・多面的・多角的な見方・考え方の育成 ・意見の整理、問題点の焦点化、問題解決の糸口の焦点化。 ・証拠、根拠に基づいた論理的思考力の育成。 <u>批判的な思考力の向上</u>

4	まとめタイム	<ul style="list-style-type: none"> <li>結論をまとめる。</li> <li>最適解，納得解を検討，意思決定をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>根拠を整理・分類・統合し，最適解，納得解につなげる。</li> <li>新たな価値の創出。</li> </ul>
---	--------	-----------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------

深い学び，新たな価値の獲得

#### 役割分担について

「ミエルトーク」の役割は下の3種類。「批判的な思考力」を高めるため，役割分担は輪番制とし，すべての役割に備わっている力を身に付けさせるように指導を継続している。

No	役割名称	担当活動
1	ミセルさん (1名)	○話し合い内容を可視化，構造化 ○意見の集約，分析，問題点の焦点化      ○発表活動での説明 ※他者に対して中立でいることが大前提。
2	アシスタント (1名)	○司会，進行      ○ミセルさんの補助 (話し合いが滞らないよう他者に声掛け，ミセルさん発言時に代理記入) ※ミセルさんと一緒に司会，進行を行ってもよいことにしている。
3	ナンデさん (2名)	○出された意見や根拠を掘り下げる。 ○誤りや矛盾がないかを考え，質問し続ける。



#### ICTの効果的な活用

GIGAスクール構想が進められ，一人1台のパソコンの活用が急速に動き始めた。コロナ渦の影響でオンラインでの学習も含め，ICTの活用も急速に進められてる。ICTを活用することで，様々な情報を収集したり，発信したりすることが可能となる。「問いー問い直しー振り返り」の「学びのプロセス」の中にICTを活用することで，これまで以上に，「瞬時の共有化」「思考の可視化」「試行の繰り返し」が効果的に実施できると考えている。

### 「学びのプロセス」とICTの活用（例）

過程	「学びのプロセス」	ICTの活用目的	ICT機器等
問 い	<ul style="list-style-type: none"> <li>前時の活動の振り返り</li> <li>問題の発見</li> <li>課題の設定</li> <li>課題把握</li> <li>問いの練り上げ</li> </ul>	<b>瞬時の共有化</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>情報の配信，受信</li> <li>資料の掲示</li> </ul> <b>思考の可視化</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>情報の交流</li> </ul>	<機器> 電子黒板・プロジェクタ・大型TV タブレットPC・実物投影機等  <ソフトウェア> デジタル教科書・授業支援ツール
問 い 直 し	<ul style="list-style-type: none"> <li>計画の立案，構想</li> <li>解決方法の探索</li> <li>情報の収集</li> <li>新たな知識，技能の獲得</li> <li>情報の分析</li> <li>仮説の検証</li> <li>考察，評価</li> </ul>	<b>試行の繰り返し</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>試行錯誤</li> </ul> <b>思考の可視化</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>収集，分析</li> <li>整理，分類，統合</li> </ul> <b>瞬時の共有化</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>考察，発表</li> </ul>	office365, google, 支援アプリ ロイロノート  <office365・google> ・オンライン会議システム ・資料の一斉送信 ・協働作業シート

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表</li> <li>・価値の創出</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・確認問題の集計 等</li> </ul>
振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知識の再構成</li> <li>・新たな知識の創造</li> <li>・結果に基づく推論</li> <li>・新たな価値の発見</li> <li>・NES評価</li> </ul>	<b>思考の可視化</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・概念の構築</li> <li>・思考継続</li> <li>・思考発展</li> </ul>	<google> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各種アプリ</li> </ul> <ロイロノート> <ul style="list-style-type: none"> <li>・思考の整理, 分類, 統合等</li> </ul> <機能等> <ul style="list-style-type: none"> <li>カメラ機能・グラフ作成</li> <li>データの共有・転送・チャット等</li> </ul>



#### □多角的な省察力（NES評価の活用を通して）

満足げな顔で、多角的に省察する生徒を目指して

##### 最後まで粘り強くやり遂げる意思

生徒はNES評価を通して、論理的に考えることの重要性に気付き、意識的に思考を深めようとする意欲が高まっていく。また、友達との関わりの中で発見した新たな価値にも気付き、もっと探究したいという粘り強くやり遂げる意思も生まれてくる。この諦めず最後まで粘り強くやり遂げようとする意思が多角的な省察力を育成することにつながっていく。

##### 失敗や挫折も経験に変える逞しさ

自己効力感や自己有用感を感じながら授業を振り返ることができるNES評価は、生徒の自信を高めることにつながる振り返りである。それは、失敗や挫折を経験したときにも、同様に大きな効果をもたらす。「成功するためにはどうしたらよいのか」「新たな方法だったら成功するのか」といった回復力を与えてくれるのである。この失敗や挫折をも経験に変える逞しさは、自己に問いかけるメタ認知能力の高まりとともに多角的な省察力の育成にもつながっていく。

##### 学びを人生や社会に生かす人間性

プラス思考の振り返りであるNES評価を継続し習慣化していくことは、いずれ対峙することになるであろう予測不能な人生や社会での様々な出来事にも、これまでと同様にプラス思考で立ち向かい問題を解決しようとする、人間性の醸成に結びつく。この豊かな人間性の醸成こそ、NES評価がもたらす大きな効果であると考えられる。

記号	意味	具体的な生徒の状況
N	もっと向上したい Need Improvement	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業内容(学習対象)に対する興味関心の高まり</li> <li>技能に対する向上心の高まり</li> <li>学習活動、グループ活動への向上心の高まり、 → ミエルトークであれば、対活動ではなく対内容</li> <li>学習活動への欲求(時間的、物理的)</li> <li>学習内容へのつまずき、自己改善への欲求</li> </ul>
E	新しい自分を発見できた Excellent	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の能力への気付き、向上と新しい自分の発見</li> <li>他者理解力の向上、他者のいいところへの気付き</li> <li>批判的思考力の向上 と 内省力の向上</li> <li>学びを深めていくことでの新しい自分の発見</li> <li>自己肯定感の向上</li> </ul>
S	自分の力を発揮できた Satisfactory	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習活動、グループ活動への参加意欲</li> <li>学習活動、グループ活動の進展への満足</li> <li>既習内容の理解と自信</li> <li>学習への満足</li> <li>自己有能感の向上</li> </ul>

記号	意味	A 態度に含まれる具体的な態度
N	もっと向上したい Need Improvement	<p>「客観的で冷静な判断」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>活用能力の向上</li> <li>視点を明確にした比較・検討</li> <li>困難克服の精神</li> </ul> <p>「誠実さと他者の尊重」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>協力的な人間関係</li> <li>協働活動の充実</li> <li>他者との交流を通じた自分の発見</li> </ul> <p>「探究的・追究的な思考」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>探究心、追究心の継続</li> <li>新たな価値の発見・創造</li> <li>既習内容の活用</li> </ul>
E	新しい自分を発見できた Excellent	
S	自分の力を発揮できた Satisfactory	

どのNES観点もA態度の具体的な態度につながるので、必要ときに文意分析から判断する

NES評価の改善

NES評価の観点

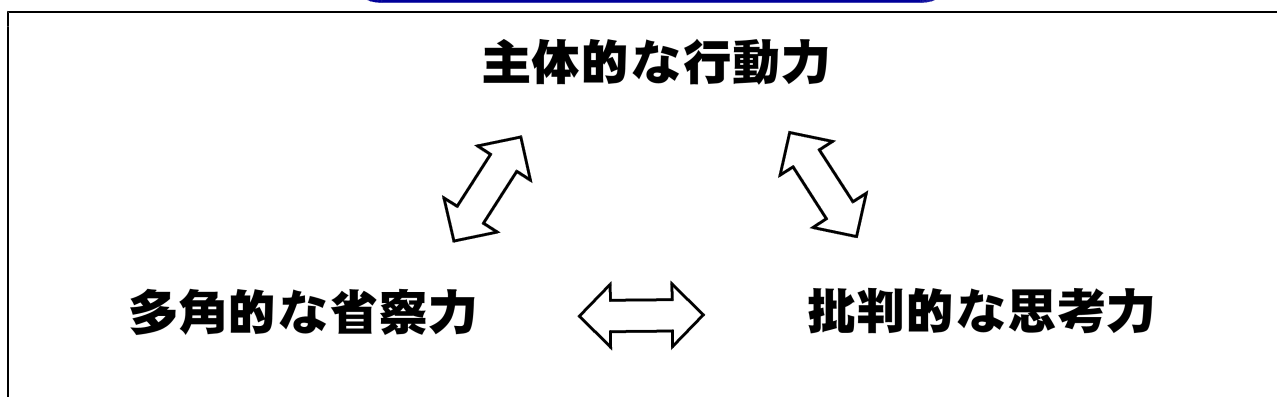
N : もっと向上したい	→ 向上したい点が具体的に記述されている。
E : 新しい自分を発見できた	→ どんな発見があったのか記述されている。
S : 自分の力を発揮できた	→ どんな点に満足できたのか記述されている。

1 単位時間での評価であれば、これまで通り3つの観点で振り返ることができるが、単元全体であったり、総合的な学習の時間のまとめの評価であったりした場合には、NES評価を以前のような「N : 向上したい点がある」「E : 自分の取組はすばらしい」「S : 自分の取組は満足できた」の3観点での振り返りの方が、取り組んだ学習の全体として有効であると考えます。そのため、学習に応じたNES評価の在り方についても、さらに検証を進めていきたい。

「未来を自立的に生きる」ための力と3つの資質・能力の関係

「未来を自立的に生きる」ための3つの資質・能力は、それぞれ単体で育成されるわけではない。つまり、主体的な行動力は、批判的な思考力を発揮させ、多角的な省察力を生かして自己決定に至る。また、批判的な思考力は、主体的に行動したことを省みて考え、それが正しかったのかどうかを判断する。さらに、多角的な省察力は、主体的に行動したことや批判的に判断したことを自己評価につなげて、次の行動に生かしていく。このよう3つの資質・能力が関わり合いながら育成されていくと考える。

**未来を自立的に生きる**





## 「未来を自立的に生きる」資質・能力を育む総合DOVE

本校では、平成10年度より、独自の「総合的な学習の時間」の活動として『総合DOVE』の実践を重ねてきている。「DOVE」とは本校の象徴である「鳩」を意味する英単語であり、『Developers enjoy studying voluntarily with originality. …独創性（創意）をもって、自発的に学習を満喫する、21世紀にはばたく生徒たち』を具現化し、「独創性（創意）をもって、自発的に探究し、他者との関わりを通して共に成長していることを実感し、自分の生き方に新たな価値を見い出していこうとする生徒たち」との願い込めた本校の「総合的な学習の時間」の名称である。

本校では『総合DOVE』という名称に「Developmental（発展的・探究的な学習）」「Original（独創的な学習）」「Voluntary（自発的な学習）」「Enjoyable（満喫できる学習）」という目指す学習の姿を意味付けしてきた。この取組は、3年間を一貫した進路探究型の総合的な学習である。これまでは、社会への一步を踏み出すために「自分の生き方」に焦点を当て、その「生き方」を自分の将来像と結び付けてきた。「未来を自立的に生きる」ことは、まさに将来の自分の「生き方」そのものである。

しかし、これまでは「自分の将来の夢」や「就きたい職業に関する研究」といったある程度限られた世界の中での研究が中心であった。今年度からは、自分の「生き方」をより世界に向け、持続可能な社会の実現に向けての将来の生き方を考えていく。つまり、「未来を自立的に生きる」ための資質・能力の見取りを総合的な学習の中でも検証していく。そこで、今年度から総合的な学習の時間では、「社会の一員として持続可能な社会をつくる」ための「自分の生き方」に焦点を当てて考えていく。

### 「未来を自立的に生きる」ために育てたい資質・能力と総合的な学習の時間

自ら問いを見つける力	→	イノベーションマインドを意識した「主体的な行動力」（自発）
自ら問い直す力	→	レジリエンスとグリットを意識した「批判的な思考力」（創意）
自ら振り返る力	→	ポジティブマインドの形成につながる「多角的な省察力」（責任）

## 【各学年の学習のゴールと探究のプロセス】

### 1 1年生のゴール

働く意義を知り、自分の生き方を幅広く考え、社会の一員として、自分たちができることを主体的に取り組もうとする生徒を育てる。

#### 1年生の探究のプロセス

- ① 自分の将来なりたい職業について考える。
- ② 働く意義を問う。
- ③ 身近な人にインタビューをして、働く意義について問い直す。
- ④ 自分が将来なりたい職業に就いている方の生き方を研究する。
- ⑤ 「Dove Academy」では、研究で分かったことを弁論にまとめ、発表する。
- ⑥ 「職場体験」に向けて準備する。
- ⑦ 職業人の生き方とSDGsとの関連を考察し、研究レポートにまとめる。

### 2 2年生のゴール

SDGsに関する興味・関心を持ち、持続可能な社会づくりに主体的に参画しようとする生徒を育てる。

## 2年生の探究のプロセス

- ① SDGsについて調べ、世界や日本の取組の現状を把握する。
- ② SDGsが自分の将来の夢や生き方とどのように関わっているかを整理する。
- ③ SDGsに積極的に参画している企業や団体等を調べ、まとめる。
- ④ 当該の企業や団体等を訪問し、SDGsの視点から秋田活性化策を計画・立案する。
- ⑤ 「Dove Academy」では、秋田活性化策をパワーポイントを用いてプレゼンする。
- ⑥ 学習旅行先で、SDGsに積極的に参画している企業や団体等を訪問し、調査する。
- ⑦ 研究の整理を通して、SDGsの実現に自分は将来どのように関わるのかを検討する。

## 3 3年生のゴール

SDGsを実現しようとする意欲をもち、持続可能な社会づくりに向けた課題に主体的に向き合い、解決策を提案したり、具体的に行動したりできる生徒を育てる。

## 3年生の探究のプロセス

- ① 17のゴールから一つ選択し、その実現に向けた具体策を考える。
- ② 具体策を実践企画（提案）にまとめる。
- ③ ②の内容について、専門的な方々とアクセスをし、指導助言してもらう。
- ④ 指導助言を踏まえて、実践企画（提案）を問い直し、補足研究する。
- ⑤ 研究内容をパワーポイントにまとめ、プレゼンをZOOM動画にして配信する。
- ⑥ 「Dove Academy」では、ディベート大会を実施し、互いのプレゼンを磨き合う。

## 本校の研究スタイル

### □明耕気風

本校では、先達によって「明耕」の気風が受け継がれてきた。「明耕」とは、ニューフロンティアの精神で生き抜こうとの意気込みから名付けられたものであり、「明耕気風」の継承のため次の点を共有化し研究実践を積み重ねていく。

- ・燃えるような熱意と信念をもって、授業研究と授業実践に取り組む。
- ・広く異見に耳を傾け、これまでの経験に固執せず、謙虚に学び続ける。

### □凡事徹底

本校では、平凡なことを非凡に続け、小さな成果を挙げるためでも、大きな努力を惜しまずに、「すぐにやる 必ずやる できるまでやる」ことを目標に次の点に取り組んでいく。

- ・子どもの元へ足を運ぶ労を惜しまず、子どもへの時間の投資を増やす。
- ・「誰かができていることを、みんなができることに」を合い言葉に実践を重ねる。

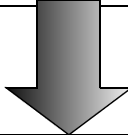
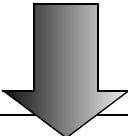
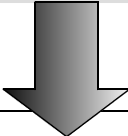
### □学貴日新

教師自身が「学びて日に新たなるを貴ぶ」の志をもってこそ、生徒に身に付けさせたい資質・能力が浸透していく。という、秋田大学教育文化学部の教育理念である「学貴日新」を継承し、次の点に取り組んでいく。

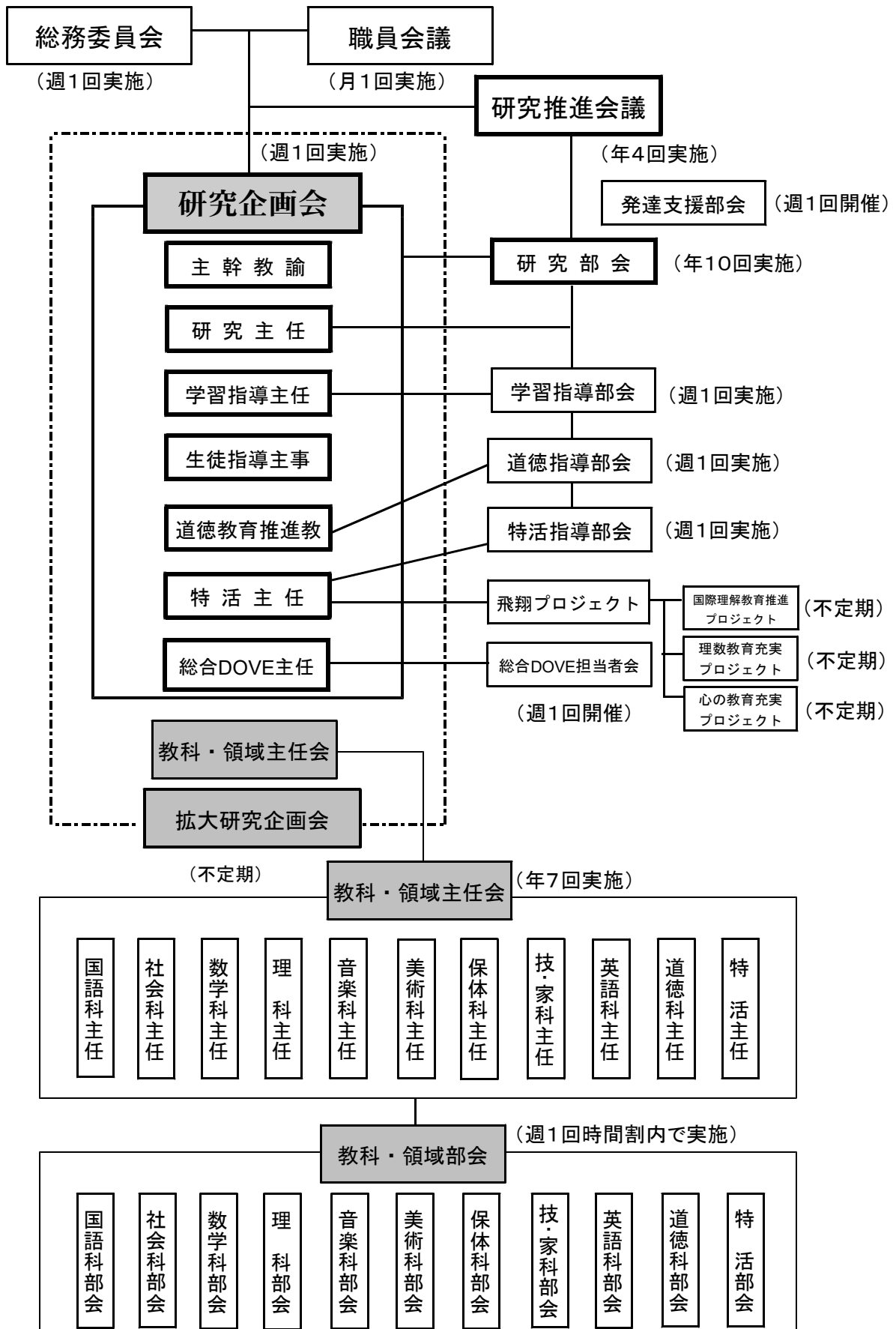
- ・教師自身も本校の「学びのプロセス」と同じ構造で研究を続ける。
- ・一人一人の教員のボトムアップによる体制で研究を推進する。

## 令和3年度・令和4年度・令和5年度 研究計画

年 次	具 体 的 な 研 究 活 動 の 内 容
令和3年度 〔研究1年次〕	<ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 「学びのプロセス」の共通理解</li> <li><input type="checkbox"/> 研究理論（全体・各教科等）の構築・提案 研究主題・研究仮説・1年次副主題の設定</li> <li><input type="checkbox"/> 研究の重点に基づく実践</li> <li>★ 春季公開研究協議会（6月4日）国語・社会・理科・特別活動</li> <li><input type="checkbox"/> 授業実践記録の作成</li> <li>★ Dove Academyによる研究成果の検証（10月）</li> <li>★ 秋季公開研究協議会（11月12日）基礎教科5・音楽・技家・道徳</li> <li><input type="checkbox"/> 授業実践記録の作成</li> <li>◆ 校内授業研究会「授業を見合う会」各教科</li> <li><input type="checkbox"/> 実践を踏まえての年間指導計画の見直し</li> <li><input type="checkbox"/> 1年次研究の成果と課題を踏まえた理論の修正（全体・各教科部）</li> <li><input type="checkbox"/> 各教科の次年度研究の重点の検討（→研究紀要の作成）</li> </ul>
令和4年度 〔研究2年次〕	<ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 研究理論（全体・各教科等）の修正案の提示 研究主題・研究仮説・研究副主題の見直し</li> <li><input type="checkbox"/> 具体的な実践の推進</li> <li>★ 春季公開研究協議会（6月）</li> <li><input type="checkbox"/> 授業実践記録の作成・蓄積</li> <li><input type="checkbox"/> 公開授業の成果と課題を踏まえた理論の修正（全体・各教科部）</li> <li>★ Dove Academyによる研究成果の検証（10月）</li> <li>★ 秋季公開研究協議会（11月）</li> <li><input type="checkbox"/> 授業実践記録の作成</li> <li>◆ 校内授業研究会「授業を見合う会」各教科</li> <li><input type="checkbox"/> 実践を踏まえての年間指導計画の見直し</li> <li><input type="checkbox"/> 2年次研究の成果と課題を踏まえての理論再修正</li> <li><input type="checkbox"/> 各教科の次年度研究の重点の検討（→研究紀要の作成）</li> </ul>
令和5年度 〔研究3年次〕	<ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 生徒の姿の変容を基にした理論の検証と今次研究全体の総括</li> <li><input type="checkbox"/> 研究理論，成果と課題の発信</li> <li>★ 春季公開研究協議会（6月）</li> <li><input type="checkbox"/> 授業実践記録の作成・蓄積</li> <li>★ Dove Academyによる研究成果の検証（10月）</li> <li>★ 秋季公開研究協議会（11月）</li> <li>◆ 校内授業研究会「授業を見合う会」各教科</li> <li><input type="checkbox"/> 実践を踏まえての年間指導計画の見直し</li> <li><input type="checkbox"/> 新たな研究視点の検討（→新研究の立ち上げ）</li> <li><input type="checkbox"/> 各教科等の次年度研究の重点の検討（→研究紀要の作成）</li> </ul>

月	主な取組
4	研究推進会議：研究内容の共通理解、共同研究者との連携 春季公開研：共通実践の分析・研究の軌道修正（Check 2） ：改善点を踏まえた共通実践（Action）
5	
6	
7	次年度研究の構想立案（Plan 1） ①実践記録の作成→成果と課題の分類と整理→継続と改善の検証 ②課題の焦点化および課題の解決方法検討 ③2学期以降の授業改善の具体的な取組決定 ④次年度研究の方針提案 DOVE ACADEMY：全体的能力の見取り（Check 3）
8	
9	
10	
11	研究推進会議：次年度研究の方針決定（Plan 2） 秋季公開研：次年度研究に向けての提案 授業を見合う会：各教科による次年度研究の共通実践（Do）
12	
1	
2	紀要作成：各教科・領域による次年度研究の軌道修正 研究推進会議：次年度研究の修正点の確認（Check 1）
3	

研究組織



## 【引用文献等】

- 佐伯 胖 著『『わかる』』ということの意味（岩波新書 1995年）
- 佐伯 胖 著「学びの構造」（東洋館出版 1975年）
- 森 和彦 著「質的情意面に焦点化した観点別学習自己評価法（NES）の実践活用に関する探索的考察」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要第32号，2010年
- ドミニク・S・ライチェン ローラ・H・サルガニク編著  
「キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして」（明石書店 2006年）
- 荻谷 剛彦 著「知的複眼思考法」（講談社 1996年）
- 高村 泰雄 著「日本の教育6 教育の過程と方法」（新日本出版社 1976年）
- 加藤 明 著「プロ教師のコンピテンシー」（明治図書 2008年）
- 小玉 重夫 著「学力幻想」（筑摩書房 2013年）
- 文部科学省 「中学校学習指導要領」（2017年）
- 楠見 孝，子安 増生，道田 泰司 編  
「批判的思考を育むー学力と社会人基礎力の基盤形成ー」（有斐閣 2011年）
- 楠見 孝，道田 泰司 編  
「批判的思考ー21世紀を生きぬくりテラシーの基盤ー」（新曜社 2015年）
- C. フェデル M. ビアリック B. トリリング・著 21世紀の学習者と教育の4つの次元  
（北大路書房 2016年）

## 【参考文献等】

- 佐伯 胖 著「認知への動機づけ」（東京大学出版会 1982年）
- 佐伯 胖 著『『学び』を問いつづけて』（小学館 2005年）
- 浅田 匡 編著「成長する教師ー教師学への誘いー」（金子書房 1998年）
- 秋田喜代美 著「授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない」（明石書店 2008年）
- 秋田喜代美 著「子どもをはぐくむ授業づくり 知の創造へ」（岩波書店 2000年）
- 市川 伸一 著『『教えて考えさせる授業』を創る』（図書文化 2008年）
- 豊田ひさき 著「学び合い育ち合う学習集団づくり」（明治図書 2001年）
- 豊田ひさき 著「集団思考の授業づくりと発問力」（明治図書 2007年）
- 日本教育新聞社関西支社編  
「新学習指導要領とこれからの学校」（日本教育新聞社 2008年）
- 小玉 重夫 著「シティズンシップの教育思想」（白澤社 2003年）
- 藤村 宣之 著「数学的・科学的リテラシーの心理学」（有斐閣 2012年）
- 松下 佳代 著「パフォーマンス評価ー子どもの思考と表現を評価するー」（日本標準 2007年）
- 国立教育政策研究所  
「資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書1～使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力～」（2015年）
- 石井 英真 著「今求められるが学力と学びとは～コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影～」（日本標準 2015年）
- 田村 学 著「授業を磨く」（東洋館出版社 2015年）
- 石井 英真 著「中教審『答申』を読み解く」（日本標準 2017年）
- 柴田 義松 著「批判的思考力を育てる～授業と学習集団の実践～」（日本標準 2006年）
- 松尾 知明 著「未来を拓く資質・能力と新しい教育課程」（学事出版 2016年）
- 長谷川 元洋 監修・著／松阪市立三雲中学校編著  
「無理なくできる学校のICT活用」（学事出版 2016年）
- 石川 一喜・小貫 仁・著  
「教育ファシリテーターになろう！」（弘文堂 2015年）
- 中央教育審議会答申 （2016年）

※ 上記は、平成21～令和2年度の研究における文献を含む。